

Title	<原典翻訳>スーフィズム・アンソロジー・シリーズ5: ハキーム・ティルミズイー 『聖者伝』 解題・翻訳ならびに訳注
Author(s)	東長, 靖
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2013), 6: 571-577
Issue Date	2013-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/173268">https://doi.org/10.14989/173268</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## ハキーム・ティルミズイー『聖者伝』解題・翻訳ならびに訳注

東長 靖\*

### 1. 解題

前回は、古典的理論書において聖者の奇蹟がどのように扱われているかを見た。古典的理論書の多くがそうであるように、それは神学(時には法学)との整合性を強調するものであり、著者クシャイリー(d.465/1072)自身、著名なアシュアリー学派神学者であった。

この神学との調和を目指す方向に対して、ハキーム・ティルミズイー(d.ca.295/907-310/922 or 318/936-320/938)は、スーフイズム独自の聖者論を展開したことで知られる。その代表作が、ここに取り上げる『聖者伝』(*sīra al-awliyā'*)である。

聖者(ワリー)はイスラームの初期から論じられてきた。最初は、断片的な情報の収集が行われたが、3/9世紀になると、テーマ別の編纂が行われるようになった。たとえば、『禁欲の書』(*Kitāb al-zuhd*)を遺したことで知られるイブン・アビー・ドゥンヤー(Ibn abī al-Dunyā, d.281/894)の『聖者の書』(*Kitāb al-awliyā'*)がその一例である。続く4/10-5/11世紀になると、より浩瀚な著書が編まれるようになった。その代表例として、イスファハーニー(Abū Nu‘aym al-Iṣfahānī, d.430/1038)の『聖者たちの飾り』(*Hilya al-awliyā'*)を挙げることができる。ただしこういった著作の場合、聖者に関して一貫した理論が存在したわけではなかった<sup>1)</sup>。本稿でとりあげるハキーム・ティルミズイーは、体系的な聖者論を構築した思想家として思想上重要な意味をもつ。

スーフイズムに独特の聖者論は、とくに「聖者の封印」説とヒエラルキー説にある。イスラームにおいてムハンマドが「預言者の封印」と呼ばれることは周知の事実だが、預言者の系譜が封印された後でも、なお幽冥界とこの世の間の交信は聖者によってなされている。しかしその聖者にも封印があり、この聖者の封印こそが最高の聖者だとする。他方、ヒエラルキー説についてはさまざまな階層化が試みられるが、ハキーム・ティルミズイーの以下のような理論がその初期の試みである。ふつうの信仰者が少し神に近づき、まだ現世の生に惹かれながらも神への愛をもつようになると「真実な者」(*ṣādiq*)になる。さらに進むと、神によって親近性と恩寵の光を照射され、「自由にして高貴な者」(*aḥrār kirām*)となる。しかしまだ彼には欲望が残っている。その欲望から依然完全には逃れていないものの、神の愛に支配されるようになると「誠実な者」(*ṣiddiq*)となる。この段階の聖者になると、神から直接インスピレーションを受けられるようになる。さらに進むと、「独一な者」(*munfarid*)となり、地上における神の代理人の地位を与えられる、というのである。

### 2. ハキーム・ティルミズイーの生涯について<sup>2)</sup>

スーフイズムの成立期(おおよそ850-950年頃)のスーフイズムのメインストリームは、「醒めた」スーフイズムとも呼ばれる「バグダード学派」と、これと正反対に、情的で神との合一について声高に語り、皮相な決まり事に拘泥しない「酔った」スーフイーたちであった。以上二つの流れ

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

1) スンナ派神学においては、聖者の存在および聖者の奇蹟の存在は根本信条として初期に確立されており、例外はムウタズィラ学派のみであった。

2) 以降の解題作成にあたっては、[Marquet 2000; Radtke and O’Kane 1996; 竹下 2002; Tirmidhī 1996]を参考にした。

は、主として首都バグダードを舞台にしていたが、それ以外にも、各地に点々と思想家たちが存在していた。そのなかの一人が、バルフに生まれ、イラクを経てマディーナで没した独自の思想家、ハキーム・ティルミズイーである。

生没年には諸説あって決しがたいが、生まれは中央アジアのテルメズで、210年代もしくは220年代頃(825年から845年頃)のことと思われる。この地は、仏教やマニ教が栄えた場所であった。没年は295/907-310/922年頃<sup>3)</sup>もしくは318/930-320/932年頃<sup>4)</sup>と推定されている。生没年が定まらないことに端的に見られるように、生涯はほとんど知られていない。自伝によれば、8歳で学習を始めたこと(父が最初の師と思われる)、27-28歳の頃巡礼に出て、バスラでハディースを学んだこと、この旅の途中で神秘道に入ったことが知られる。261/874年頃、愛を唱えて民衆をたぶらかした廉でバルフに喚問されたが、結果的には数年後に故郷に戻ることをえた。269/882年には彼の妻の夢によって、聖者論で40人いるとされる「誠実な者」(ṣiddīq)に彼が到達したことが証される。285/898年にニーシャープールに向かったと言われるが、それ以降の彼の足跡は杳として知れない。

伝承重視の立場(ahl al-ḥadīth)をとり、理性重視派(ahl al-ra'y)を批判すると同時に、表現の外面にとらわれる人々を非難して、その裏に潜む内面的意味を重視した。

彼は、その時代において非常に多くの支持者や弟子を得たとは思われないが、その著作を通じて後代に大きな影響を与えた。カーディリー教団の祖とされるアブドゥルカーディル・ジーラーニー(d.561/1166)や神秘主義哲学者イブン・アラビー(d.638/1240)らに思想的影響を与えたことがよく知られている。

### 3. ハキーム・ティルミズイーの著作について

彼の主要な著作には、以下のようなものがある。

#### *Kitāb sīra al-awliyā'*

本稿で紹介するもの。くわしい説明は次項参照。

#### *Nawādir al-uṣūl fī ma'rifa aḥādīth al-rasūl*

ティルミズイーの著作のなかで最も浩瀚なもの。ハディースを引用し、それを解説する形で、スーフイズムのさまざまな問題を論じる。広く読まれ、多くの写本が残る。イスタンブール刊行の古い刊本があるが、校訂はよくない。

#### *'Ilal al-sharī'a*

上記 *Nawādir* と同様の執筆意図で書かれたもの。バルフに連行される不信仰の嫌疑は、本書および *Kitāb sīra al-awliyā'* のせいであろうと想定される。刊本はない。

#### *Kitāb al-manhīyāt*

これも上記2点と同様の執筆意図のもとに書かれているが、とくにシャリーアのなかの禁止事項に焦点を合わせる。1986年にペイルートから刊本が出ている。

#### *Kitāb al-ṣalāt*

礼拝について述べたもの。1965年にカイロから刊本が出ている。

#### *Kitāb al-ḥuqūq*

3) B. Radtke, *al-Ḥakīm at-Tirmidī: Ein islamischer Theosoph des 3./9. [i.e. 8./9.] Jahrhunderts*, Freiburg: K. Schwarz, 1980 による。

4) *EI<sup>2</sup>* および *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi* による。

社会のなかでさまざまな職業・役割を果たす人々についてのスーフィー的見解。刊本はない。

*Kitāb al-amthāl*

神秘体験・神秘道についての論攷。1975年カイロ刊行版がある。

*Bayān al-farq bayn al-ṣadr wa al-qalb wa al-fu'ād wa al-lubb*

ティルミズイーの靈魂論に関する単著として知られるものであるが、偽作説がある。刊本・英訳が存在する。

その他、彼には以下のような著作がある<sup>5)</sup>。

*al-Farq bayn al-āyāt wa al-karāmāt*

*'Ilm al-awliyā'*

*Kitāb adab al-nafs*

*Kitāb al-akhyas wa al-mughtarrīn*

*Kitāb al-furūq*

*Kitāb riyāḍa al-nafs*

*Kitāb al-riyāḍa wa adab al-nafs*

*Masā'il al-ta'bīr*

*Manāzil al-qāṣidīn*

#### 4. 『聖者伝』について

本書は、オスマン・ヤフヤー (Osman Yahya) がイスタンブルの2つの写本を発見し、*Khatm al-awliyā'* (『聖者の封印』) の書名のもとにベイルートで1965年に刊行した。1992年にベルント・ラトケ (Bernd Radtke) が、ほかの2つの著作と合わせて、新しい校訂をベイルートで刊行した。彼は、本書の書名として『聖者の封印』に代えて、『聖者伝』を用いることを提唱し、今日ではこの書名が広く用いられている。

本書でティルミズイーは、悔悟から始まり、内奥の魂の規律化を経て、敬虔な内省に至る内面への道を描く。しかしこの心の内奥への道は、同時に大宇宙へと向かう、外へ、上へと開ける道でもある。この道の途中には、さまざまな陥穽が修行者を待ちうけている。

本書の中心テーマは、預言者ムハンマドの精神的後継者である「聖者の封印」である。ティルミズイーは自分自身をこの「聖者の封印」であると考えていたと思われる。

#### 【解題への参考文献】

Marquet, Y. 2000. s. v. "al-Tirmidhī, Abū 'Abd Allāh b. 'Alī al-Ḥakīm," *EI*<sup>2</sup>, vol. 10.

Radtke, B. and J. O'Kane. 1996. "Introduction," in their *The Concept of Sainthood in Early Islamic Mysticism: Two Works by al-Ḥakīm al-Tirmidhī*, Surrey: Curzon Press, pp. 1–13.

竹下政孝 2002. 「ティルミズイー, ハキーム」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店。

Tirmidhī, al-. 1996. "The Autobiography of the Theosophist of Tirmidh," trans. by B. Radtke and J. O'Kane, in their *The Concept of Sainthood in Early Islamic Mysticism: Two Works by al-Ḥakīm al-Tirmidhī*, Surrey: Curzon Press, pp. 15–36.

5) [Radtke and O'Kane 1996: 2–5; Marquet 2000] 等を参照のこと。

## 5. 翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、al-Ḥakīm al-Tirmidhī, *Thalātha muṣannaḥāt li-l-Ḥakīm al-Tirmidhī: Kitāb sīra al-awliyā'*, *Jawāb al-masā'il allatī sa'ala-hu ahl Sarakhs 'an-hā*, *Jawāb Kitāb min al-Rayy*, ed. by Bernd Radtke, Bayrūt: al-Maṭba'a al-Kāthūlikīya and Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1992, pp. 1–3, 33–35 を底本として使用した。

ハキーム・ティルミズイーは、ワリーを「アッラーの義務に近い人」と「アッラーに近い人」の2種に分けて説明する。本稿でも、この両者のさわりを訳出しておいた。底本の pp. 1–3 が前者の説明の冒頭部、pp. 33–35 が後者の説明の冒頭部にあたる。

この「聖者の奇蹟」章も、前稿同様、2006年度の京都大学におけるアラビア語・スーフィズム文献講読で取り上げたものであり、同講読には下記の学生諸君が参加した（敬称略、所属は当時）。横内吾郎、篠田友暁、小倉智史、岩本佳子（以上文学研究科）、高垣ひとみ、上柿智生（以上文学部）、黒田賢治、堀抜功二、丸山大介（以上アジア・アフリカ地域研究研究科）。これら学生諸君から貴重な意見・示唆を与えられることが少なくなかった。

## 翻訳

1/ 慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名にかけて。

(1) アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アリー・イブン・ハサン・イブン・ビシュル・ティルミズイー——彼にアッラーが慈悲を与え賜いますように——は言った。

さて、君は、ある人々が聖者職の性質について取り上げているようなことについての議論を口にした。そして、諸々の聖者の状態や、彼らの高い位置、彼らを認めることの必要性、聖者は自分自身〔が聖者であるということ〕を知っているのかどうか、について質問した。また君は、聖者職はそれを持っている人には知られないし、自分を〔聖者〕とみなす人は、〔聖者職〕からは程遠い、と人々が語っている、と言ったね。

(2) 知りなさい。こういった議論を好んで取り上げる人は、こういった事柄について何者でもないのだ。ただ、〔聞きかじりの〕知識<sup>6)</sup> という方法で聖者職の状態を表現したり、〔いい加減な〕類推<sup>7)</sup> や憶測や、あるいは自分勝手な妄想によって語ったりするものなのだ。彼らは、〔人々〕の主〔であるアッラー〕の運命〔(である幸運)を分与されている類〕の人ではないし、聖者職の高みにも達していない。〔人々〕にアッラーから齎される恩寵も知らない。もっとも、彼らの言っていることは誠実だし、物事に対する彼らの水準も誠実ではある。〔しかし、〕高み〔に属する話題〕に至ると、2/ 僕へのアッラーの恩寵<sup>8)</sup> を真に理解することができずに、彼らの発言は止まってしまう。なぜなら、彼らは、〔そもそも<sup>9)</sup>〕〔アッラー〕を理解することができないのであり、アッラーを真に理解しない者が、そのみ業を理解することはもっとできない相談だからだ。それゆえ、彼らの話は、結局は胡乱の言辞となってしまうのだ。

6) 「〔靈知(内面的知識)でなく、〕(外面的)知識」。もしくは「〔実践の伴わない〕知識」という意味かもしれない。

7) maqāyīs > miqyās. R.P.A. Dozy, *Supplement aux dictionnaires Arabes*, Leiden, 1881; repr. Beirut: Librairie du Liban, 1968, vol. 2, p. 440 参照。

8) *ṣun'*。この語は、次に出る「み業(ṣana'i')」と深く関係しており、「神の恩寵である創造」といった意味と思われる。

9) *qad 'ajazū* という過去完了の意味合いを、「そもそも」の形で訳出した。

(3) 我々の立場によれば、聖者（「近い人々」）には2種類ある。1種は「アッラーの義務<sup>10)</sup>に近い人々」であり、その[もう]1種は「アッラーに近い人々」である。しかしその両方とも、[広い意味では]「アッラーに近い人々」に関わりがある。

(4) 「アッラーの義務に近い人々」についていえば、その酔い<sup>11)</sup>から覚め、アッラーに向かって悔い改め、その悔い改めをアッラーに対して実行しようと決意するような人のことである。[こういう人は]自らに[神から]求められている、この実行に意を払う。それ[ここでいう実行]が、次の7つの身体器官——舌、耳、目、手、脚、腹、性器——を慎むことである時、[アッラーの義務に近い人々は][身体器官]を自らの意のままにする。[自ら]の思いと情熱を、この7つの身体器官を慎むことに集め、それ以外のなにもものをも忘却し、背筋を正すまでになる。彼は、諸々の義務を果たし、決まりを守る人であり、何ものによってもそのことを妨げられない。これらの身体器官を慎み、ついにはしなければならぬことをアッラーに対して実行し続けることになる。そうやって、彼の[放縦な]魂は休まり、その身体器官も安んずるのである。

(5) 彼は自分の状態を見つめる。木はそのままの状態にいるのに、その枝が切られているような木の位置に自らの[放縦な]魂を見出すために、大いに危うい時には、少し[この木にもたとえられる魂]を忘れては、[これでいいのだと]安心してしまう<sup>12)</sup>。木は、初めそうだったように、そこから枝が出てくると、[枝]を切る度に、[木は]その[枝のあった]場所に同じような[枝]を生やす。もう枝が出てこないようにと、根のところから[木]を切るべく、木を切り分けようとし、 $\sqrt{3}$ [木]を切って、[木]のトラブルから逃れたと思う。しかし、その根から枝が[再び]現れると、根のところから[木]を引き抜かないことには、[木]の悪(災厄)から逃れることはないことを知る。そして、根のところから掘り起こした時に[初めて]ほっとするのである。

(6) この僕[アッラーの義務に近い人]が、自らの身体器官が安んじたのを見ると<sup>13)</sup>、自らの内面[である魂]に目を向ける。自らの魂がこの身体器官の諸々の欲望に満ち満ちていると、次のように言う<sup>14)</sup>。[これらの身体器官の欲望]は、もっぱら[魂の]一つの欲望であり、[その一つの欲望]については、[身体器官の欲望]のあるものは私に許され、あるものは禁じられる。私は大いに危うい。私は、許されたもの以外を見ないように、私の目を慎まなくてはならない。[私の目が]禁じられたものに至ったら、[目は]閉じられ、そむけられる[べきである]。舌も、すべての身体器官も同様である。一時でも慎むことを忘れたなら、[欲望<sup>15)</sup>が]私を滅びの谷へと突き落とすのだ。

この[身体を慎むことを忘れれば滅びに至るという]恐れ(khawf)に陥ると、怖れ(makhāfa)が彼をしてあらゆることをできなくさせ、道徳[を果たすこと]を妨げ、アッラーの命令の多くを遵守することを不可能にする。そうして、[僕は][あらゆる命令]ができず、欲望に満ちた魂から来る身体器官を恐れるあまり、あらゆる命令から逃げる者の一人になってしまうのだ。

10) haqq. アッラーにとって「真理」であり、それを命ずることがアッラーにとって「権利」であるような神の命令、すなわち人間の立場からすると「義務」を指す。このような理由から、本翻訳ではあえて「義務」の訳語をあてている。

11) sukr. ここでは、スーフイズムの用語として積極的な意味で用いられる「陶醉」ではなく、現世的な欲望にまみれた状態を指す。

12) 直訳すると、「彼を安心させるものは、少しそれを忘れることである。」

13) nazara ... ilā jawāriḥ-h qad hada'at. 知覚動詞で、状態を表す動詞が完了形で示されている例。W. ライト『アラビア語文典』（後藤三男訳）、下巻、ごとう書房、1987年、91ページ以降参照。

14) 「言う」の内容は、このパラグラフの終わりまで。

15) この女性単数形の主語が何であるかについては、いろいろな可能性が考えられるが、shahwa wāhida であると解しておく。ほかに、shahawāt, nafs, jawāriḥ などの可能性もなくはない。

(中略。以下、「アッラーの義務に近い人」の説明は省略し、「アッラーに近い人」の説明の部分の翻訳に移る。)

133/ (48) アッラーに近い人についていえば、その階位に確固としている人であり、[自らに求められる] 条件<sup>16)</sup> をアッラーに対して実行する。それはちょうど、[アッラー] に対して、[修行の] 途中で誠実さを実行したこと、また [いやになって] 放り出してしまったり、意に反して強制されたりする<sup>17)</sup> 場 [合] において、誠実さを [実行したこと] と同様である。そして、諸々の義務を果たし、決まりを守り、[自らの] 階位にじっくりと坐し、遂には、姿勢を正させられ、矯正され、しつけられ、清められ、浄められ、純化され、心広くされ、涵養され、糧を与えられ、勇気を与えられ、[決まりを守ることに] 慣れさせられる。こうして、アッラーに近い人 (聖者) 性は、彼において、この 10 の美質<sup>18)</sup> によって完成する。そして、彼の階位から至高性の主宰者 (mālik al-mulk<sup>19)</sup>) [であるアッラーの高み] に移され、その御前に列せられ、その [アッラーとの] 秘密の語らいが面と向かってのものになる<sup>20)</sup>。そうして [アッラー] に専心して、その他のものを顧みなくなり、[アッラー] によって、自らをもあらゆることをも忘却する。[アッラー] は、彼を [自らの] 手中に入れ<sup>21)</sup>、[アッラー] の知性で彼を縛り、[アッラー] に信頼される者の一人となし、[彼は] 全権を委任された者のごとく、[何かをする際の] 許しの必要はないようになる。なぜなら、134/ [アッラー] の命令の何かに赴くならどこでも、[彼はアッラー] の手中にいるからである。いかなる砦が、[アッラー] の手中にいることより強固であろうか、いかなる守護者が、守護において、[アッラー] の最大知性よりも強力であろうか。

(49) そして、このことがアッラーの使徒——彼にアッラーが祝福と恩寵をたれたまいますように——が、ジブリール——彼に平安あれ——から伝え聞いたこととして、また [ジブリールは] 至高なるアッラーから伝え聞いたこととして語った次のことば [によって示されているもの] である。「我が僕は、我が [課した] 義務の遂行 [によって私に近づくこと] のように私に近づきはしない<sup>22)</sup>。まことに [僕] は、その後は、私が彼を愛するための余徳の行 (nawāfil) によって、私に近づくのである。私が彼を愛すると、私は彼の聴覚に、彼の視覚に、舌に、手に、足に、心になり、[彼は] 私によって聞き、私によって見、私によってしゃべり、私によって打ち、私によって歩き、私によって思考するのである<sup>23)</sup>。」

これ [このような状態になった人間] は、[アッラーの] 最大知性のために [その人間] の [小ざかしい] 理性が減し、[アッラー] の手中にあるために [その人間の] 欲望に満ちた諸々の動きが安らかになるような僕なのである。これが、ムーサーが彼に向かって「おお我が主よ、私はあ

16) 以下に述べる、宗教的義務や決まりを守ることを指している。

17) inqitā'-h wa-(i)dtīrār-h. 別の訳語として、「アッラーから自分が切り離されることと、[その反応として] アッラーを必要とすること」も考えられる。

18) 実際に本文には、11 の美質が挙げられている。校訂者のラトケは、一つの写本にしか見られない「糧を与えられ」を省くのがよからう、と訳注で述べている。

19) Q3:26. 王権の主、大権の主。

20) kifāh. E. W. Lane, *An Arabic English Lexicon*, London, 1863-93; repr. 4 vols., Beirut: Librairie du Liban, 1980 に face to face の意味がある。

21) qabḍa. アッラーが人間をしっかりと「つかむこと」。

22) 義務を遂行することが、人間が神に近づく最良の方法である、の意。

23) これは、スーフイズムで頻繁に引用される「余徳の行のハディース (hadīth al-nawāfil)」である。「余徳の行」と仮に訳しているナワーフィルとは、義務とされているもの以外の宗教的善行で、修行者が自ら行うものを指す。

なたをどこに求めればよいのですか」と語った際の至高なる「アッラー」のお言葉、「おお、ムーサーよ。どのような家が私を包み込めるといのか、いかなる場所が私を担えるといのか、私がどこにいるのか知りたいなら、私は捨て去る者、放棄する者、慎み深い者の心の中にいる〔のだと知れ〕。』なのである。

(50) さて、捨て去る者とは、〔自ら〕を〔自ら〕の努力で捨てる人のことであるが<sup>24)</sup>、そこにはまだ〔目標に至るまでの〕残余〔すなわち、足りないもの〕がある。それで、その主は、私たちが〔主〕を形容したところのもの<sup>25)</sup>を、〔彼〕にお与えになる。そうして、〔彼は〕〔自ら〕から死ぬことによって、〔自ら〕に別れを告げ、それで、慎み深くなり、何ものにも心を奪われなくなる<sup>26)</sup>。このことがあのことに相当する<sup>27)</sup>〔これら2種の「近い人」〕のいずれも、誠実さでもってアッラーの命令を担い、ついにはアッラーもまた、彼らのために担ってくださる。さて、第1〔の近い人〕にとって、聖者性は〔アッラーの〕慈悲 (rahma) から出、〔アッラーは〕高みの館から/35/近さの位階への、彼の一瞬の移動を担う。第2〔の近い人〕にとって、聖者性は〔アッラーの〕寛大さ (jūd) から出、王国をひとつ、またひとつと飛び越え、〔近さ〕から至高性の主宰者〔であるアッラー〕への彼の一瞬の移動を担う。それが、「アッラーは信仰する者の守護者で、暗黒の深みから、かれらを光明の中に導かれる。」(Q2:257)というアッラーのお言葉〔の意味するところ〕である。すなわち、アッラーは〔煩惱にまみれた〕魂<sup>28)</sup>の闇 (zulmāt al-nafs) から近さの光へ、ついで近さの光から〔アッラー自身〕の光へ、彼らを導くことを担われるのである<sup>29)</sup>。それから、〔アッラーは〕「見なさい。アッラーの友には本当に恐れもなく、憂いもないであろう。」(Q10:62)といわれた。すなわち、アッラーは、彼らをつかまえることを担い、彼らが自らの〔煩惱にまみれた〕魂に打ち克つようになさる。そうすると、彼らは現世の日々において、〔アッラー〕の義務〔の達成〕を助けること (nuṣra huqūq-h)<sup>30)</sup>をゆだねられる<sup>31)</sup>。ついで、〔アッラーは〕彼らを〔自ら〕に連れていき、〔自ら〕の面前の場所にお集めになる<sup>32)</sup>。そうすると、彼らは被造物に対して〔アッラー〕へ〔戻れと〕呼びかけ、〔アッラー〕を賞讃することを担う〔ようになる〕<sup>33)</sup>。ついで、これら近い人々がどういった人々であるかを特徴づけられる。そうすると、〔アッラーが〕「かれらは信仰し(ていた者たち)、」と言われ〔たように〕、すなわち、彼らが〔アッラー〕を信頼する〔ようになり〕、「(アッラーを)畏れていた者たち。」(Q10:63)〔といわれたように〕、すなわち、彼らが〔アッラー〕以外の誰かを信頼してしまうことを畏れる〔ようになる〕のである。

24) これは、「アッラーの義務に近い人」に相当する。なお、この部分は、「捨て去る者とは、その捨て去り (tark-h) が、〔自ら〕の努力による人のことであるが」とも訳しうる。

25) 何を指しているのか、よく分からない。Radtkeは、「先に私たちが……」と訳し、これ以前の記述に言及しているものと解している。

26) これは、「アッラーに近い人」に相当する。

27) 何を指しているのか判然としませんが、「ここで述べていることが、かつて述べた2種類の聖者のことに相当する」の意か。

28) nafsには、己我、エゴ、我執、くらの訳語も考えられる。

29) ここで、「魂の闇から近さの光へ」導かれるのが「アッラーの義務に近い人」、「近さの光から〔アッラー自身〕の光へ」導かれるのが「アッラーに近い人」である。

30) 「〔アッラー〕の義務の勝利」という訳語でもよいかもされない。

31) この状態の聖者は、「アッラーの義務に近い人」に相当する。

32) これ以降、本節の終わりまで、「ついで (thumma)」の後にアッラーの側の行為が描かれ、「そうすると (fa-)」の後に聖者の側の行為が描かれる、という形で記述が行われる。

33) この状態の聖者は、「アッラーに近い人」に相当する。